

Prasannapada第25章の研究

著者	王 俊淇
学位授与年月日	2018-03-22
URL	http://doi.org/10.15083/00077830

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 王 俊淇

大乘仏教思想を代表する空思想の根拠聖典である『中論』(2世紀、ナーガールジュナ著)には、おもに中観派と称される系譜に属する思想家たちによって著された諸注釈書が存在する。なかでも『プラサンナパダー』*Prasannapadā* (6-7世紀、チャンドラキールティ著)は、サンスクリット語として残された唯一の典籍であることから、散逸した『中論』のサンスクリット語原典を復元する稀少な資料となっている。それに加えて、著者チャンドラキールティは、本著のなかで中観派の伝統内部に伏在する思想的差異を顕在化させ、同時に他学派である唯識派との思想的差異を明確にして論を展開したことで、ここに至るまでの大乘仏教思想史を総括する役割を果たした。こうした理由によって *Prasannapadā* は、諸注釈のなかでも格別に重要なものとして学界の注目を惹いてきた。本論文は、その *Prasannapadā* の議論全体を総括する位置を占める第25章「涅槃章」について、第一線の研究成果を批判的に踏まえて校訂テキストを完成し、その成果にもとづいて従来の理解を種々の点で改める新たな知見を提供したものであり、進展する『中論』研究をさらに前進させた成果として評価される。

論文は、「涅槃章」を構成する諸主題を論じた第I部「研究編」と、サンスクリット語写本とチベット語訳諸本を対照して校訂テキストを提示する第II部「テキスト編」からなる。研究編は、研究史を整理した序論、中国とチベットの注釈者たちの解釈を比較しつつ『中論』全体の構成を解明した第一章、チャンドラキールティの涅槃観を論じた第二章、涅槃理解を論ずる四句分別について、記号論理によって解決を図ろうとする近現代研究の問題点を明らかにした第三章、言語(仏説)と真理(さとり)という二極の緊張関係を主題とした「一字不説」の歴史的展開と意義を論じた第四章からなる。ことに注目すべきは、各章の課題が最初期以来の仏教思想の展開を意識して考察されているため、結果的に *Prasannapadā* がインド仏教思想史のなかで占める位置をも同時に示唆していることである。テキスト編では、Anne MacDonald の最新の研究成果を踏まえたうえで、ポタラ写本の価値を評価する新たなテキストシステムのスキーマを提示するとともに、Louis de La Vallée Poussin の校訂本を凌ぐ批判的校訂テキストを提示することに成功している。多少なりとも論述の粗い箇所は散見されるものの、本論文が斯学の発展に寄与するところは大きい。

以上の審査結果をもって、本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。